形容詞「まぶしい」の出自について
――「マボソイ」→「マボシイ」→「マブシイ」――

増井典夫

1．はじめに

日本語学において、「語彙」の分野の研究は、まだまだ遅れている面も多い。特に、形容詞については、よく知られているとは言い難い。

本稿で取り上げる「まぶしい」については、真田信治氏が、徳川宗賢氏編『日本の方言地図』（中公新書、昭54・3）所収の「標準語の地理的背景」において、「上方語マブイを母胎として〈まぶしい〉が生まれた」との説を述べているが、この説は近世・近代にみる文献の記述と符号しない点があるように思われる。

では、まず前記の真田氏の記述を見てみよう。

まぶしい（眩しい）――上方語マブイが母胎――

暗い場所から急に明るい所へ出たときの感じを形容する語は、全国的に非常にバラエティに富んでいる。分布図によってもその一応の様相はうかがわれよう。しかし、これとてそのあらましを示したにすぎず、実はもっともっ

と多彩な表現形が各地に存在するのである。くわしくは原図である『日本言語地図』を見てほしい。

現代標準語形はマブシイであるが、この語形が使用されている地域は主として関東地方であって、その領域は案外と狭いのである。分布模様から推定すると、この語形は東京（おそらく江戸）を中心に勢力を広げたもののようである。関東から東北に広がるマッポイと伊豆諸島でのマツポシイは活用形式の上でク活用とシク活用との違いはあるが、同系の語形とみてよく、過去には連続していたものであろう。そしてある時期、その領域をマブシイが断ち切ったものと思われる。また、山梨・静岡・愛知などのヒドロイ、ヒズルシイと茨城・千葉でのヒデッポシイは、たぶん語源的に「日（太陽）」と関わりをもつ同系の語形であろう。これもマブシイによって領域を断ち切られたものと思われる。

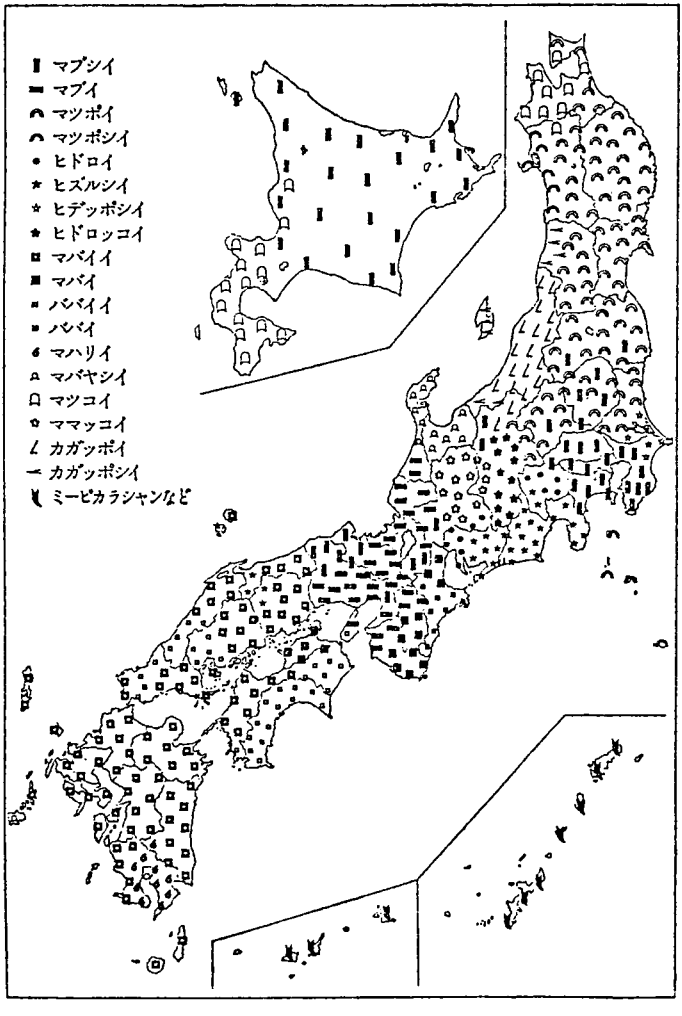
ところで、これら古層と認められるマツポイ系およびヒドロイ系と、新しい勢力としてのマブシイとは系統上はつながらないもののようである。では一体、関東でのマブシイはどのようなプロセスを経て成立したものなのであろうか。そのことを解明するために、次に関西方面に目をむけてみよう。

この地域では、関東周辺部とは異なって、マブシイに関わりのあると認められる語形が強い勢力をはっていることに気付くのである。まず、マブイ。この語形は現在、近畿中央部に勢力をもって存在しているのであるが、マブイとマブシイはク活用とシク活用の違いこそあれ同系のものと認めることができよう。実際、マブイの領域内にはマブシイも点々と存在している。マブシイは、おそらくこのマブイを母胎として生まれたものであろう。それが、ある時期、江戸へ移植されたと考えられる。したがって、現代標準語形マブシイもまた、本来は上方に出自するものと推定されるのである。

しかし、近畿におけるマブイとて、それほどに古い時代からのものとは認められない。なぜなら、このマブイの

領域を周囲からとりかこむような形でマバイイ、マバイ、ババイイ、ババイなどのマバイイ系統の語形が分布しているからである。言語地理学的見地からは、この系統の語形がおそらく近畿中央部でのマブイの一時代前の分布層であったと考えられる。マバイイは、古語のいわゆる「まばゆし」の直系である。この語は現代でも、特別な場合

まぶしい（眩しい）



に文章語として使用されることがある。たとえば、「夢に仏がまばゆい姿で現われた」のように。マバイ、ババイイ、ババイなどはマバイイからの変化形である。

鹿児島に分布するマハリイは、その周囲をマバイイによってとりかこまれている。これもマバイイが変形してできた語形であろう。また、石川・富山に分布領域をもつマバヤシイもマバイイの変化した語と考えられる。この地域には、ほかにも、たとえば「いらだたしい」という意味を表わすハガイイがハガヤシイに変化するといったような現象が存在するからである。

近畿において、マバイイ系統の語がある時期マブイと交替した。その契機についての確かなところはわからない。しかし、マバイイの変化形マバイとマブイとは音韻的にそれほどへだたったものではないという点に、一つの手がかりを求めることができそうである。

以上に記した以外に、地域的に勢力をもつ語形としては、青森のマツコイ、新潟のカガッポイ、沖縄のミーピカラシャンなどがある。マツコイは青森から北海道南部にかけて広がっている。これはたぶん、東北最大の勢力をもつマツポイからの変化形であろう。語尾が～コイとなる語形は岐阜・長野にもみられる。岐阜のものはママッコイ、長野のものはヒドロッコイであって、前部は異なるが、後部の同じものが隣接して分布していることが注意を引く。新潟を中心とする地域には集中してカガ～の類が分布している。このカガ～はおそらく「輝く」の語幹と関連があろう。カガッポイはク活用、カガッポシイはシク活用の語であるが、このようなク活用形とシク活用形の語の対立が多いことは、「まぶしい」の表現形での著しい特徴ということができる。

なお、奄美・沖縄地方に分布するミーピカラシャンのピカラは、おそらく「光る」という語に関係していよう。語頭のミは本土方言のメ（目）に対応するものである。

（『日本の方言地図』２２１ｐ～２２５ｐ）

2．「まぶしい」の前に「マブイ」なし

ここでまず問題になるのは「果して〈まぶしい〉発生以前に上方語マブイが存在したか」という点である。そこで近世の文献からまず見ていきたい。

はじめに『物類称呼』（安永四・１７７５年）からである。

○羞明（まばゆし）といふ事を　中國にて・まぼそしと云　江戸にて・まぼしいと云　東奥にて・まじぼひ（イ）と云　美濃尾張邊にて・かゝはゆひ（イ）と云　土佐にて兒童など・ばゞいひといふ（ばの濁音はまの清音にかよふ也）

（巻之五）

この記述には「まぶい」も「まぶしい」も見えない。一方、江戸では「まぼしい」という語が使われていたことがわかる。

では江戸語における、「まぶしい」に関連する語彙にはどのようなものがあっただろうか。『江戸語大辞典』（前田勇編）にはこう記載されている。

まばゆい【目映い】《形》＊　まぶしい。天明元（１７８１）年・通人三国師「いツそまばゆうおざんすはな」

まぶ《形動》＊　①盗賊隠語。悪いに対して、良いこと。上々。美しくないのに対して、美しいこと。寛政四（１７

92）年・桃太郎発端話説「今はまぶな金持になりました」②芝居者隠語。嘘・贋に対して、真実・本物。寛政十一年・品川楊枝「芝居のふちやう（略）ほんの事を、まぶ」

まぶい《形》①操り・浄るり社会隠語。良い。美しい。文化九（1812）年・浮世床二上「やつかい（めつさう）にまぶい（うつくしい）所へかま（行）つたはいの」②盗賊・職人なども前項と同義に用いるが、いずれが先か、にわかに断じがたい。明和七（1770）年・神霊矢口渡四「めんかのまぶいげんさいの事さ」③香具師隠語。うまい。文化三年成・潮来婦志後中「まぶい（うまい）けれど」④露天商人隠語。にぎやかだ。弘化三（1846）年・魂胆夢輔譚四上「余（あんま）りとひがまぶいから」（原注「マブイとは、にぎやかなこと」）

まぶしい【眩しい】《形》まばゆい。寛政二年・繁千話「もつてへなくつて、まぶしくつて、どふもよられんせん」

まぼしい【眩しい】《形》まぶしい。まばゆい。享和三（1803）年・甲駅雪折笹「まぼしくつてしれねへ」

まぼしがる【眩しがる】《自ラ五》まぶしがる。まばゆがる。安永三（1774）年・柳多留九「どなただと中将ひめはまぼしがり」

『江戸語大辞典』でみる限り、「まぶしい」意での「マブイ」の例は認められないこと、『物類称呼』で見られる「まぼしい」より前の「まぶしい」の例は認められないことがわかる。（『近世上方語辞典』には「まばゆい」「まぶい」「まぶしい」等の記述なし）。

なお、「まぼしい」について『日本国語大辞典』を見ると、次のような例が挙がっている。

まぼし・い【眩】《形口》文まぼ・し《形シク》「まぶしい（眩）」に同じ。＊雑俳・高点部類－安永四（1775）

年「まぼしく見せて仕廻ふ流し目」＊人情本・春色辰巳園ー天保五（１８３４）年ー後・八回「あんどうをいだす。『仇さん、おめへはまぼしかろう』」 方言 江戸 †01 東京都南多摩郡 279

まぼし-が・る【眩】《他ラ四》（形容詞「まぼしい」の語幹に接尾語「がる」の付いたもの）「まぶしがる（眩）」に同じ。＊雑俳・川柳評万句合-宝暦十二（１７６２）年・松一「八朔に病み目のかふろまほしかり」

「まぶしい」については、『江戸語大辞典』に挙がっている例より古いものは見られない。このことから見ても、「まぼしい」の後から「まぶしい」が出てきたと推定される。

続いて、幕末から明治期の辞書を見ると、『英和対訳袖珍辞書』（１８６２）では、Ｇｌｉｍｍｅｒの訳語として「覩（マバユカル）」が挙げられているほか、Ｌｏｏｍの訳語として「眩（マボ）シガラセル」が挙げられている。

一方、『和英語林集成』３版（明１９・１８８６）では、「まばゆい」「まぶしい」「まぼしい」は立項されているが、「まばい」は立項されていない。

『言海』（明２２）での記述は次のようなものである。

ま-ばゆ・し・キ・ケレ・ク・ク（形・一）目映 （一）光、烈シク赫キテ、正シク見難シ。マボシ。マブシ。「日影ー」羞明 （二）盛ナルニ對シテハ恥カハシク、荒涼ナルニ對シテハメザマシク、目、ソバメラル。

†まぶし（形）まぼしノ轉。（東京）羞明

まぼ・し・シキ・シケレ・シク・シク（形・二）目映（マバユ）シ、ノ轉訛。マブシ。（東京）羞明

一方、『日本大辞書』（明25）では次のような記述が見える。

●ま・ばゆイ（第三上）形。まばゆしノ近體。
まばゆ・さ（第二上）名。マバユイ度合ヒ。
○ま・ばゆシ（…）形。〔目映し〕（一）光リ烈シク、物ヲ見ニクイ。＝マブシイ。（二）一方ガ盛ンデ、ソレニ對シテ恥カシイ。
▲まぶイ（第二上）形。マブシイ（京坂）。
○まぶし（第二上）形。まぼしノ轉。
●まぶしイ（第三上）形。前ノ近體。
△まぼし（第二上）名。まばゆしノ轉。

管見では、「まぶしい」意での「マブイ」の例は、『日本大辞書』のものより前はない。そこで、『日本国語大辞典』の「まぶい」の記述を見てみると、次のようになっている。

まぶ・い【眩】《形口》（「まぶ」の形容詞化）①容貌が美しい。＊浄瑠璃・神霊矢口渡-四「おれががんばって置ためんかのまぶいげんさいの事さ」＊滑稽本・浮世床-初・上「芸が能（いひ）ときてゐるに、面がまぶいと云ふもんだから」＊歌舞伎・曾我梅菊念力弦-二幕「因果者の夫太だが、余ッぽどまぶい代物だから」②仕事などが、うまくいく。都合がよい。＊洒落本・潮来婦誌-後・中「どうろくが気をつければ、まぶいけれど、げんさいま

かせだから」③金回りがよい、金持である意の盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕④晴天である。晴れている意の盗人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〕**方言** 光が目にまぶしい。まばゆい。「日が当たってまぶい」石川県能美郡441　福井県坂井郡464　長野県東筑摩郡523　滋賀県彦根619　京都625　大阪637　神戸659　淡路島660　奈良県宇智郡669　和歌山県682　徳島県805　香川県817　《まぶいい》広島県比婆郡751　《まびい》千葉県長生郡一宮270

ここにも「まぶしい」意での「マブイ」の例はない。

結局、文献上言えることは、「まぼしい」「まぶしい」以前に「まぶしい」意での「マブイ」の存在を認めることは出来ないということである。

3．「まぼしい」→「まぶしい」について

前項では、「まぶしい」の前に「まぶしい」意での「マブイ」の存在は認められないこと、「まぶしい」は「まぼしい」の後から出てきたことを述べた。

「まぶしい」が「まぼしい」の変化と見られていることは『言海』や『日本大辞書』に見る通りである。

「まぼしい」は明治期においても、特に漱石等によく使用が認められるものであった。

ぎら〳〵する日を少時見詰めてゐたが、眩しくなったので、（『門』、集英社『漱石文学全集』四、p471・6）

『作家用語索引第一期』の範囲で見ると『坊っちゃん』（明39）、『三四郎』（明41）、『それから』（明42）、『門』

（明43）と「まぼしい」の使用のみ見られ、「まぶしい」は見られない。大正期の作品である『行人』に至って初めて「まぶしい」の使用が見られるのである。（「まばゆい」の例は『彼岸過迄』（明45）と『行人』に一例ずつ見られる）。

さて、「まぶしい」が「まぼしい」の変化したものだとすると、その変化の要因は何であろうか。

そこで、先の（『江戸語大辞典』に挙げられている）「繁千話」の例を見ると、「まったいなくって、まぶしくて」とあり、ここでは「まばゆい」意のほか「立派だ」の意も含まれていると考えられる。つまり「まぼしい」＋（美しい意の）「まぶい」として「まぶしい」は出てきたのではないかということである。

もっとも、この「繁千話」の例は特殊なものとも考えられ、近世では他に「まぶしい」の例はなかなか見当たらない。

4．「まぼそい」→「まぼしい」

前項では「まぶしい」の前の形として「まぼしい」を見たが、では現代における「まぼしい」の使用域はどの程度のものだろうか。

『日本言語地図』を見ると、「まぼしい」は関東地方のほか西日本では但馬地方、丹後地方などに使用が認められる。（56～63ページ参照）

ここで、先の『物類称呼』の記述を思い起こすと、「中国にてマボソシ、江戸にてマボシイ」とあった。また、近世前期の文献である『男重宝記』（元禄六・1693）にも、

羞明（まばゆし）といふ事を中国にてまぼそいといへり　（五・二）

（『日本国語大辞典』による）

とある。但馬、丹後地方は山陰地方であり、現在でも中国地方との結び付きは強いと思われる。このことから、但馬、丹後地方に見られる「まぼしい」は「まぼそい」の転かとも思われる。「まぼそい」と「まぼしい」は音も近く、「まばゆくて目を細める」意で「まぼそい」を使っていたのが「まぼしい」に転じたことも考えられるのではないか。

なお、北関東から東北にひろがる「マツポイ」と「マボシイ」とを関連付けることは、間に「マッポシイ」の分布が見られない以上、難しいようである。

5．関西における「マバイ」→「マブイ」

現在、関西地方において用いられている「マブイ」は、どのような経過で発生したのだろうか。

「まばゆい」が変化して「まばいい（まばい）」になったことは容易に想像がつく。しかし、「まばい」から「まぶい」へは、音変化というだけではやや無理があるようである。

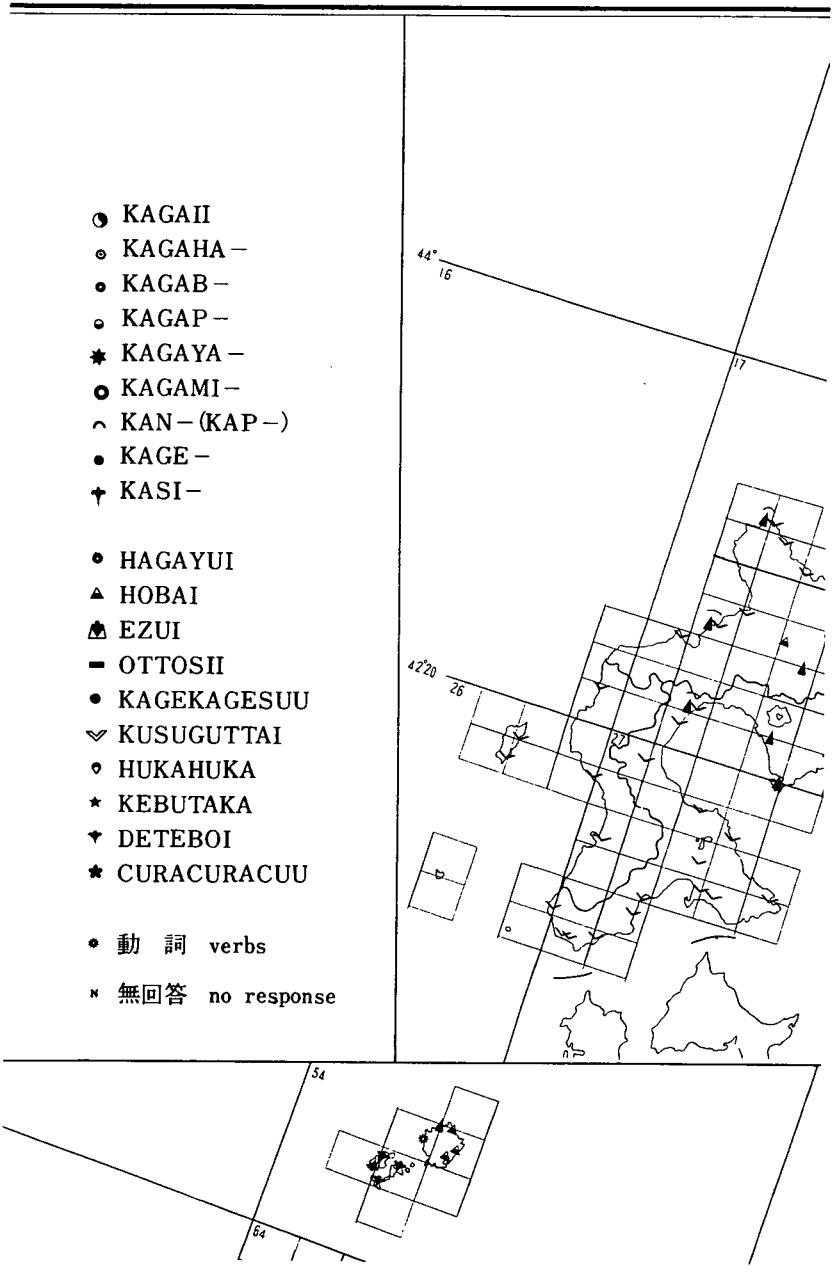
考えられるのは、一つには「美しい」意での「まぶい」の影響ということである。これは江戸語における「まぼしい」から「まぶしい」への変化の過程でも考えられたことであり、関西における「まばい」から「まぶい」への過程でも考えうることだとおもわれる。

もう一つには、江戸語・東京語における「まぶしい」の影響ということである。「まぶしい」の初出が洒落本であり、「まぶしい」意での「マブイ」の初出が『日本大辞書』だとすると、時期的に見て「まぶしい」の影響で「まばい」が「まぶい」に変わったとも考えうる訳である。

- KAGAII
- KAGAHA－
- KAGAB－
- KAGAP－
- KAGAYA－
- KAGAMI－
- KAN－(KAP－)
- KAGE－
- KASI－

- HAGAYUI
- HOBAI
- EZUI
- OTTOSII
- KAGEKAGESUU
- KUSUGUTTAI
- HUKAHUKA
- KEBUTAKA
- DETEBOI
- CURACURACUU

- 動　詞　verbs
- 無回答　no response



30 まぶしい（眩しい）－前部分

dazzling, blinding (first element)

MABU－
MAMU－
MABO－
MABA－
MYABA－
MAMA－
MAWA－
MAHA－
MABE－
MAME－
MAHE－
MABI－
MAGA－
NABA－
NAMA－

AMABU－
AMABO－
AMABA－
AMAHA－

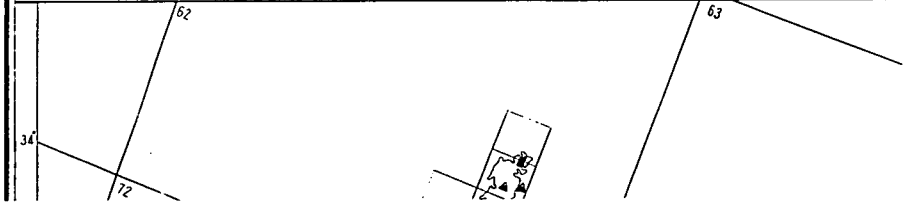
ABABO－
ABABA－
ABAA－
ABA－
BABA－
BAKABAKA－
BATABATA－
BABE－

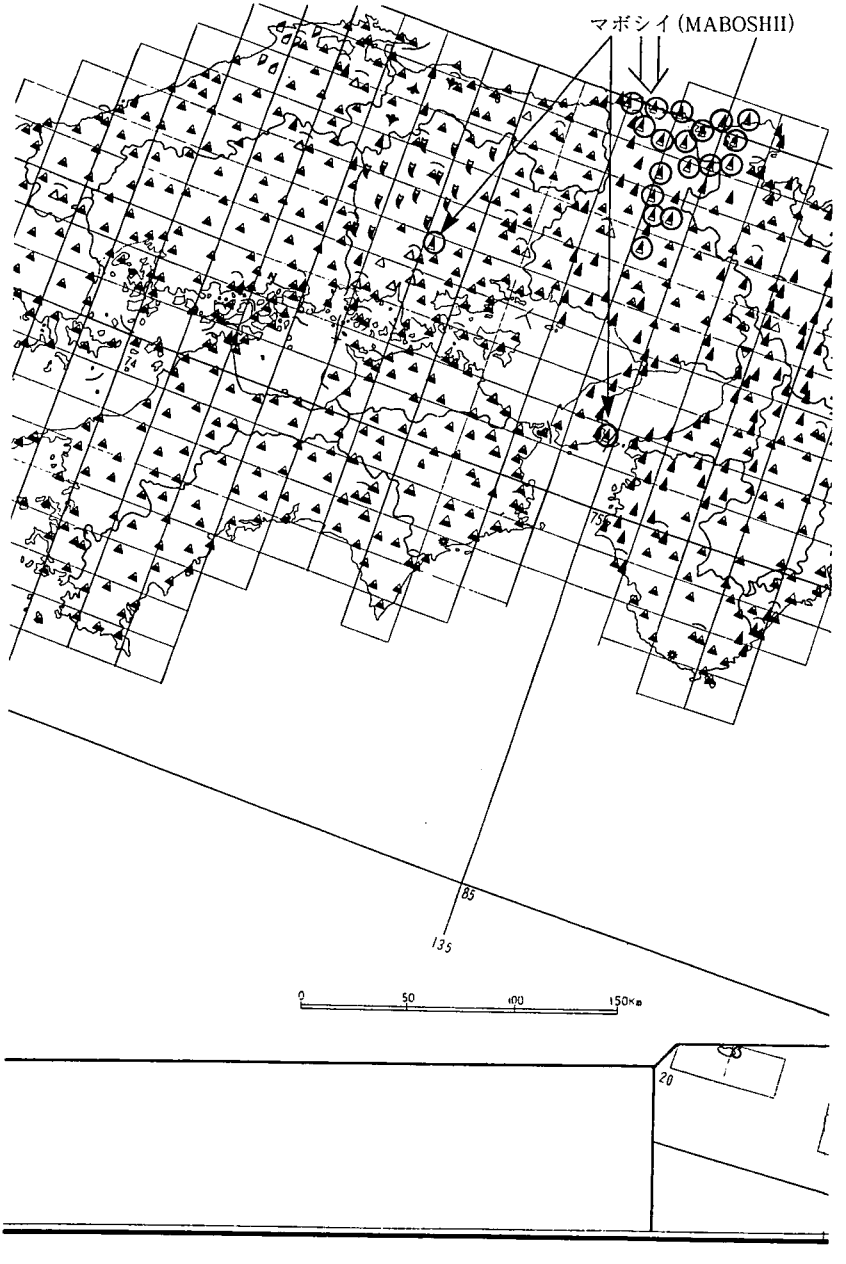
MACU－
MACYO－
MASI－
MAKI－
MAP－

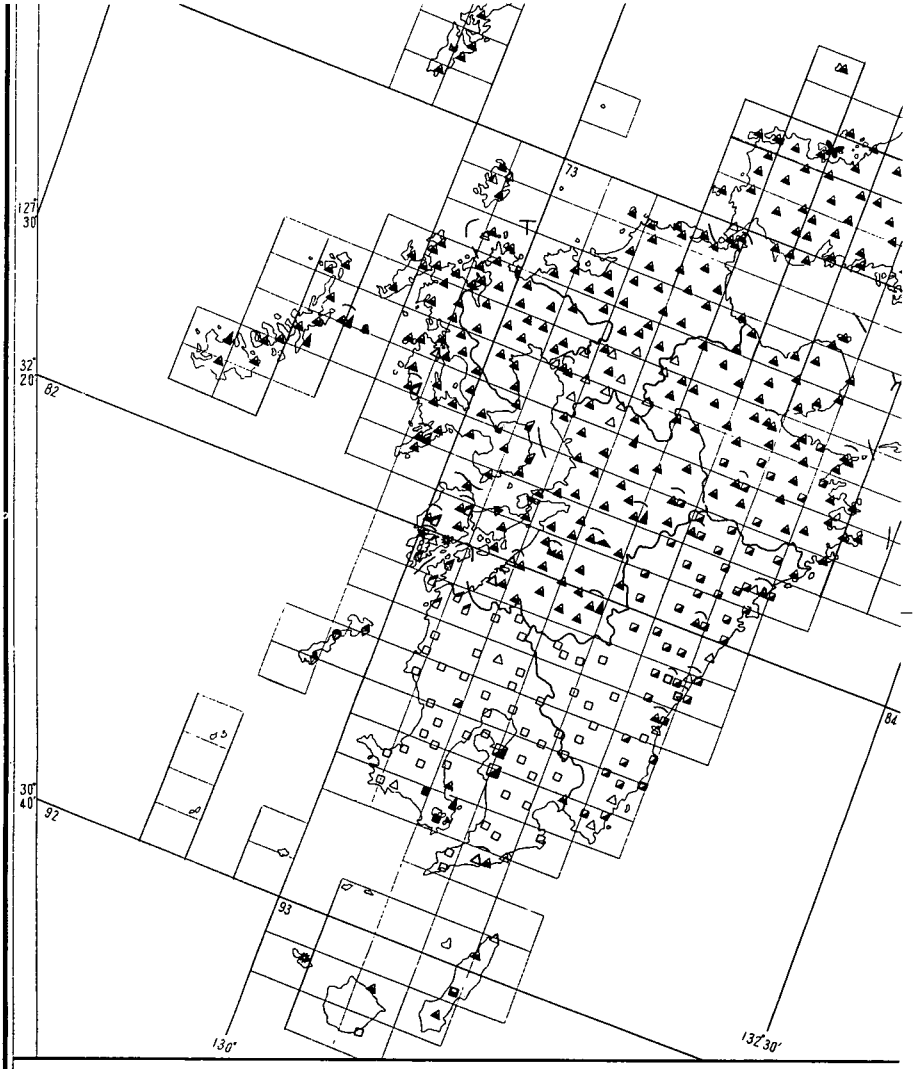
MEBA－
MAIBA－
MEMA－
MEWA－
MEYAWA－
MEHA－
MEME－
MEZU－
MEBO－
MIBO－
NEBA－

MI－
MII－
MIN－
MAN－
PIKA－
NMIBUSIKAM
MAISYAN
MAGI－

HIBABA－
HIDO－
HIDA－
IDARA－
HIDE－
HUDE－
HUTE－
HITE－
HICIRO－
HIZU－
HIGI－
HIGA－
HIGU－
HIMA－
HIME－
HIMU－
HUMA－
HINE－




マボシイ (MABOSHII)
75
85
135
0
50
100
150km
20



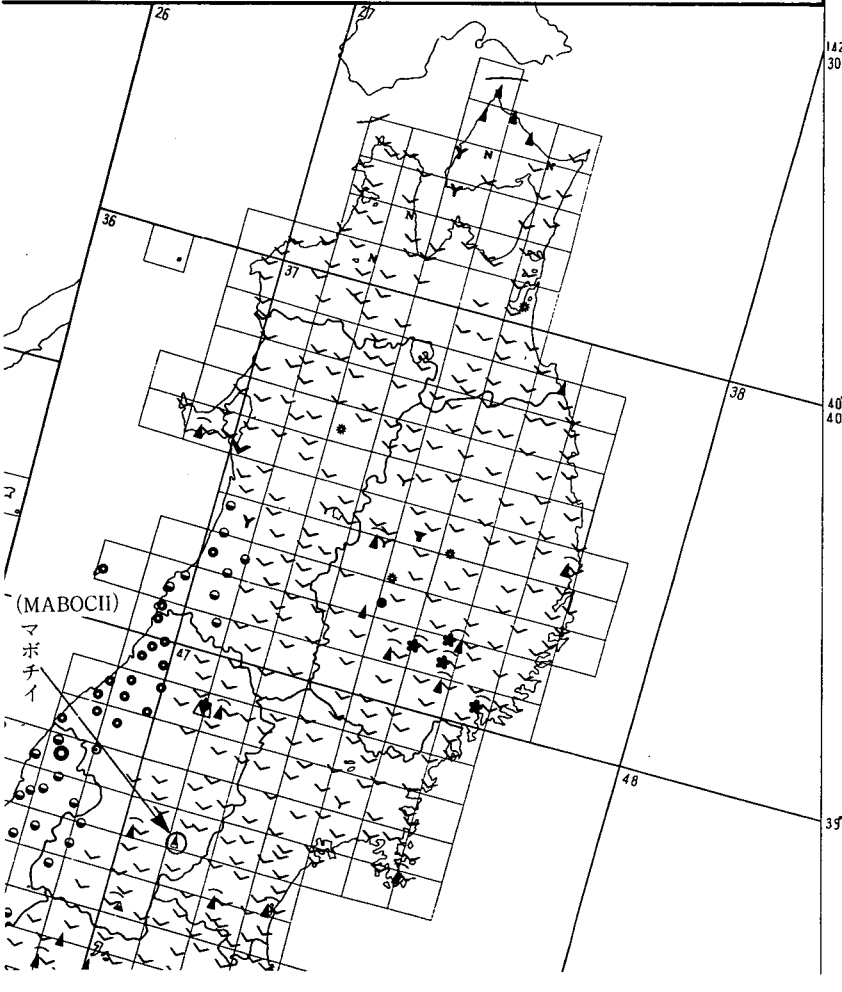
質 問 文：太陽を見るとあまり明かるいので目のあけていられないような感じがします。その感じをどんなだと言いますか。(115)

日本言語地図

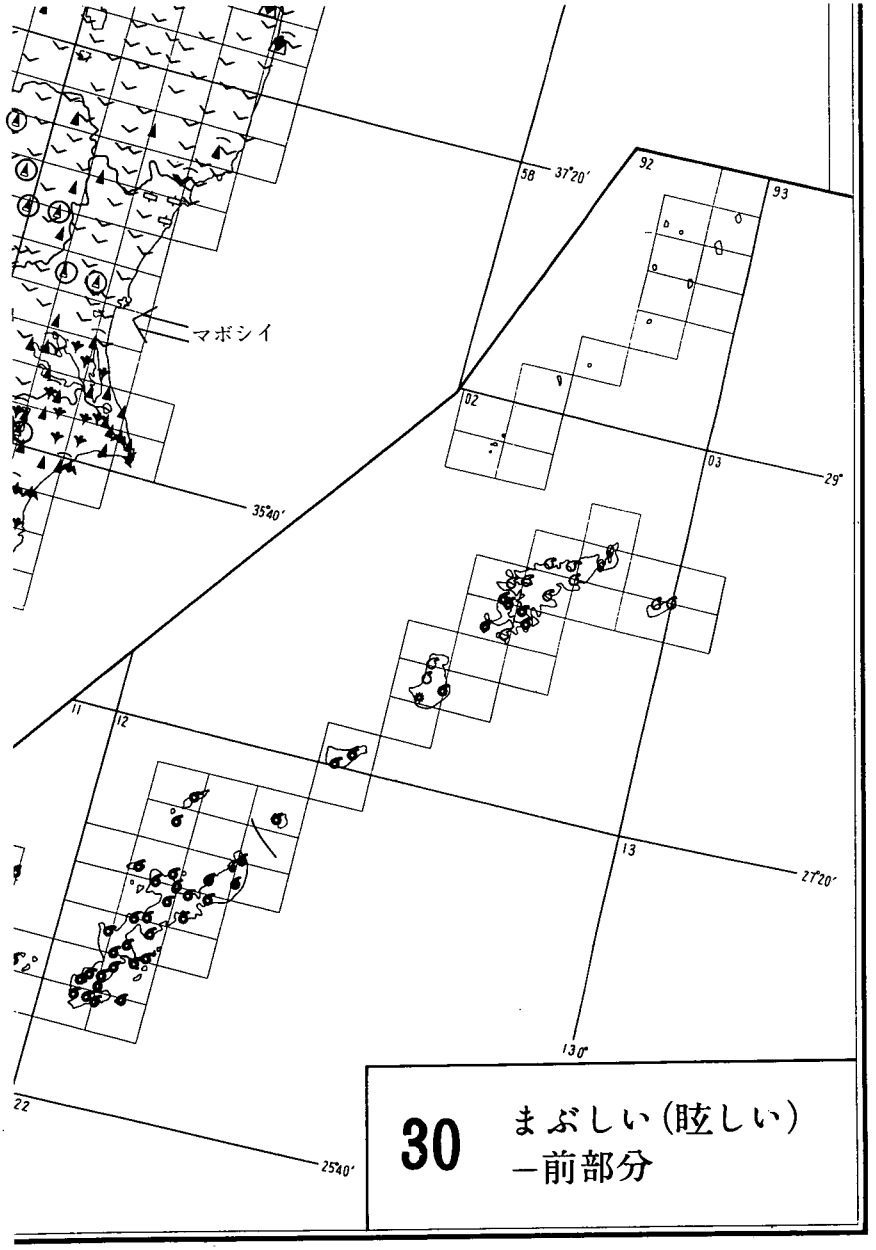
国立国語研究所

GUISTIC ATLAS OF JAPAN

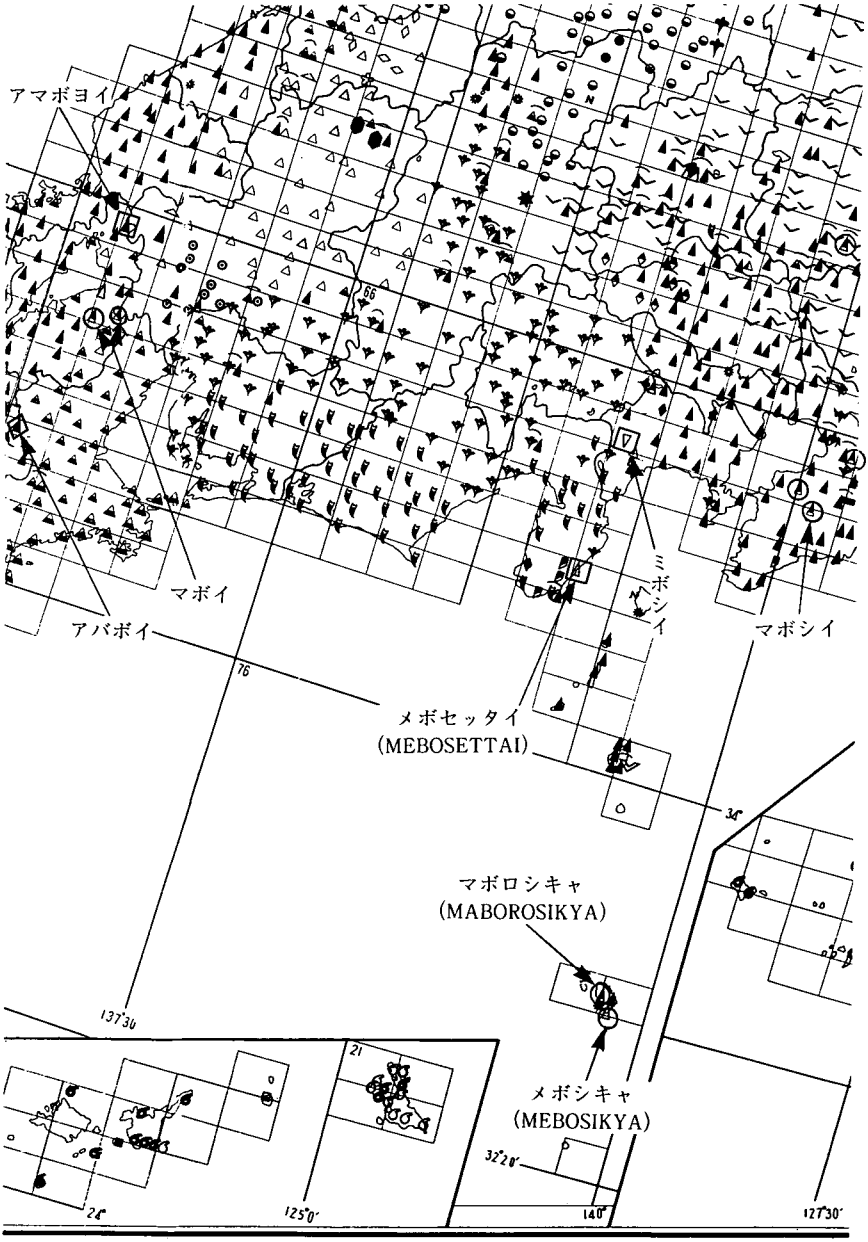
NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



140°
07
45°40′
142°30′
08
LIN
145°
09
18
19
28
46
45
56



30 まぶしい（眩しい）
—前部分


アマボヨイ
マボイ
アバボイ
ミボシイ
マボシイ
メボセッタイ
(MEBOSETTAI)
マボロシキャ
(MABOROSIKYA)
メボシキャ
(MEBOSIKYA)
76
34°
137°30′
24°
125°0′
140°
127°30′
32°20′
21
66

この変化では、第一の要因が大きかったのではないかと想像するところではあるが、第二の要因も考慮においておかなければならないように思われる。

6. おわりに

形容詞の「まぶしい」は、「まぼそい（目細い？）」から「まぼしい」を経て生まれたと思われることを述べてきた。このほか、「まぶしい」の意味の問題として、「日の光がまぶしい」のか、相手が立派なために「恥ずかしいように思う」のか、を区別した用法はしていないのか、ということがある。

例えば、東海地方でのかなりの地域で、「日の光がまぶしい」意で「ヒドロイ、ヒズルシイ」を用いるということだが、『日本言語地図』を見ると、岐阜県南部で「カガハイイ」を用いるとなっている所がある。しかし、山田達也氏ほか何人かの方から、その地域でも、「恥ずかしいように思う」の意では「カガハイイ」を用いることはあっても、「日の光がまぶしい」意では「ヒドロイ」か「ヒズルシイ」を用いるのではないか、調査のやり方に問題があったのではないか、との疑問が提示された。

そのあたりの点については、私の調査は不行き届きであり、自分の見解を述べることは差し控え、今後の検討課題としたい。

このほか、より細かく見て行けば、まだまだ問題はあると思われる。今後、更に考えていきたい所である。

（ますいのりお　専任講師）